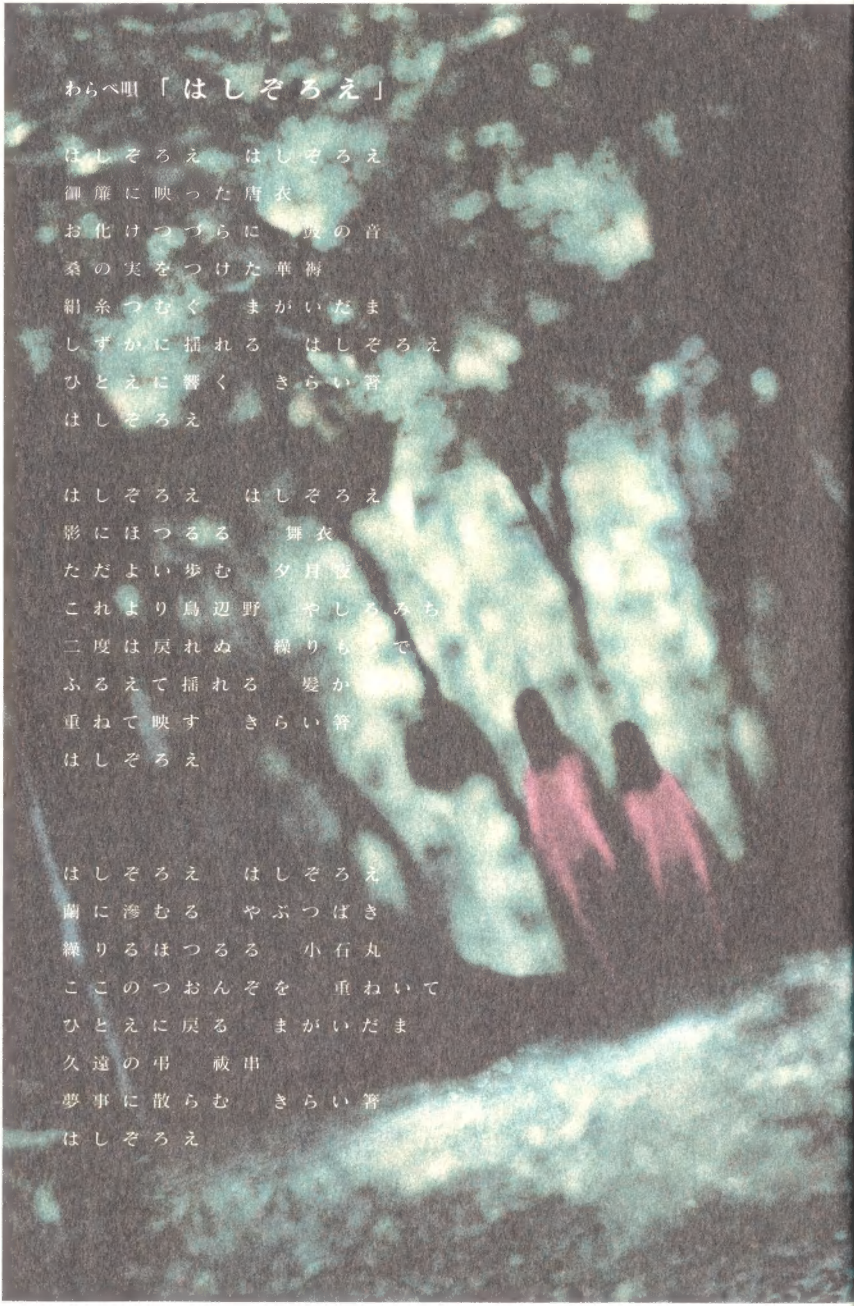


小説版

九怨 -kuon-

―記憶之章―



わらべ唄「はしぞろえ」

はしぞろえ　はしぞろえ
御簾に映った唐衣
お化けつづらに　鼓の音
桑の実をつけた華褥
絹糸つむぐ　まがいだま
しずかに揺れる　はしぞろえ
ひとえに響く　きらい箸
はしぞろえ

はしぞろえ　はしぞろえ
影にほつるる　舞衣
ただよい歩む　夕月夜
これより鳥辺野　やしろみち
二度は戻れぬ　繰りも　で
ふるえて揺れる　髪か
重ねて映す　きらい箸
はしぞろえ

はしぞろえ　はしぞろえ
崩に滲むる　やぶつばき
繰りるほつるる　小石丸
ここのつおんぞを　重ねいて
ひとえに戻る　まがいだま
久遠の弔　祓串
夢事に散らむ　きらい箸
はしぞろえ


記憶之章

父である芦屋道満は、一度山をおりると数日間は戻らない事もあり、一人で何かをするには若すぎる姉妹は、何処へ行くのも、何をするにでも一緒だった。

「浮月～、早く、早く～」

後ろを振り返り大きく手招きをする。

「待ってよ～、おねえさま～」

臆病な浮月はいつも、元気で活発な暮葉を追いかけるのがやっとで、その日も二人は、近くの山道で花を摘んだり、枯葉で飾りを作り遊んでいた。

「あら？こんな所に…」

暮葉が道端で何かを見つけた。息を切らしながら浮月も遅れて駆けつける。

「おねえさま…、どうしたのですか？」

道端の何かを覆う木の葉を退ける暮葉に声を掛ける。積もり積もった枯葉や砂を払い、少しずつ姿を表す塊。

姿を表したその塊は、どうやら仲良く並ぶ双子地蔵のようだった。

「お地蔵様のようですね…」

仲良く並ぶ二体の地蔵を見ながら暮葉が言った。

「えぇ…、でも何故…」

浮月も不思議そうに返す。

少し異様な雰囲気を纏っているおさげ頭の地蔵を、二人揃って見つめる無言の時間が流れる。

それもそのはず、二人が幼い頃から知っているこの場所に、地蔵なんて物は無かったからだ。

「何故、今まで気がつかなかったのかしら…」

どうも腑に落ちない暮葉は、自分自身に問い掛けるように呟いた。しかし次の瞬間には考える事を諦めたように一息つき、手に持っていた花束から小さな花を一本ずつ添えた。

「今までは誰にも気づかれず寂しい思いをしたかもしれませんが、これで寂しさも紛れるでしょう」

小説

浮月（うつき）と暮葉（くれは）

著　谷口篤士



「嫌な雨…」

今まで厳粛な父の言い付けを守り、神社から外へ出た事の無い浮月は、いつまでも降り続く雨に心までも曇らせながら小さく呟いた。

「浮月、これではお屋敷へ行けません。雨止みを待ちましょう…」

空を眺めながら姉の暮葉が言った。

「わかりました。お姉さま。」

浮月は雨に濡れる境内を眺め、その音と景色に昔の思い出を重ねながら小さく頷いた。

蚕を飼っていた神社に住んでいる姉妹の家は、人里離れた山奥にあった。

枝がささった土の山に、持っていた残りの花を添え祈る暮葉。動揺を隠しきれない浮月は、一応手を合わせるものの目は虚ろだった。

「それにしても何故、桑の実が…」

暮葉は、今埋めた烏の異様な姿を思い出しながら小声で言った。その烏の骸は、生物と思えない程に柔らかく、持ち上げると掌にぬるりと纏わりつく感じがした。不自然に膨らんだお腹には、持ち上げるだけで目や口から溢れ出す程の桑の実が詰まっていた。苦しみながら絶命した表情に、目や口から噴出する桑の実。それはとても異様で、見ているだけで嫌悪感が沸いた。

「この辺りに桑の木など無かった筈なのにね…」

語尾に合わせて浮月の顔をうかがう。

「え…、ええ…」

浮月は戸惑いながら力の無い返事をする。青白い顔をした浮月を見た暮葉は、これ以上怯えさせてはいけないと思い、すっくと立ち上がる。

「さぁ浮月。随分遅くなってしまいました。帰りましょう」

少し大袈裟な笑顔で励ますように語りかけ、泣き出しそうな浮月の手を取って山道を指差した。

歩み始める姉に手を引かれながらも、浮月は盛り上がった土の山からなかなか目を離せずにいた。

あたりはすっかり暗くなっていた。

一体どの位歩いただろう。

とうに神社へ着いていてもおかしくない距離なのに、景色は一向に変わらなかった。

くたびれた足と、いつしか離れた二人の手がその距

地蔵に軽く微笑みながら、目を閉じ手を合わせる。

「そうですね…」

今まで気がつかなかった事に対する違和感ではない、別の何かを感じながらも浮月は同意した。

そんな浮月の頬に一粒の雨があたる。

「雨…?」

見上げた空は、いつのまにか黒い曇で覆われ、しとしとと雨を降らせ始めている。

普通、外にいれば雨などすぐ気がつく物だが、地蔵の後ろに覆い被さるように生い茂った大木が、気づくのを遅らせたようだ。

空を気遣う浮月に気がついた暮葉は立ち上がり、浮月が見ている方向に目を向ける。すると、それと同時に黒い雲から生まれた黒い点が大きくなり、空を見上げる姉妹のすぐ近くに何かが落ちてきた。

ドサッ！　バサバサッ！

怯えながらも音の主を見つめる暮葉と浮月。落ち葉にまみれながらもがくそれは、片方の羽がもがれた鳥だった。

力尽きて落ちてきたのか、何処かの枝にぶつかったのか、どちらにしても羽を失う傷の説明にはならない。

「どうして、こんな傷を…」

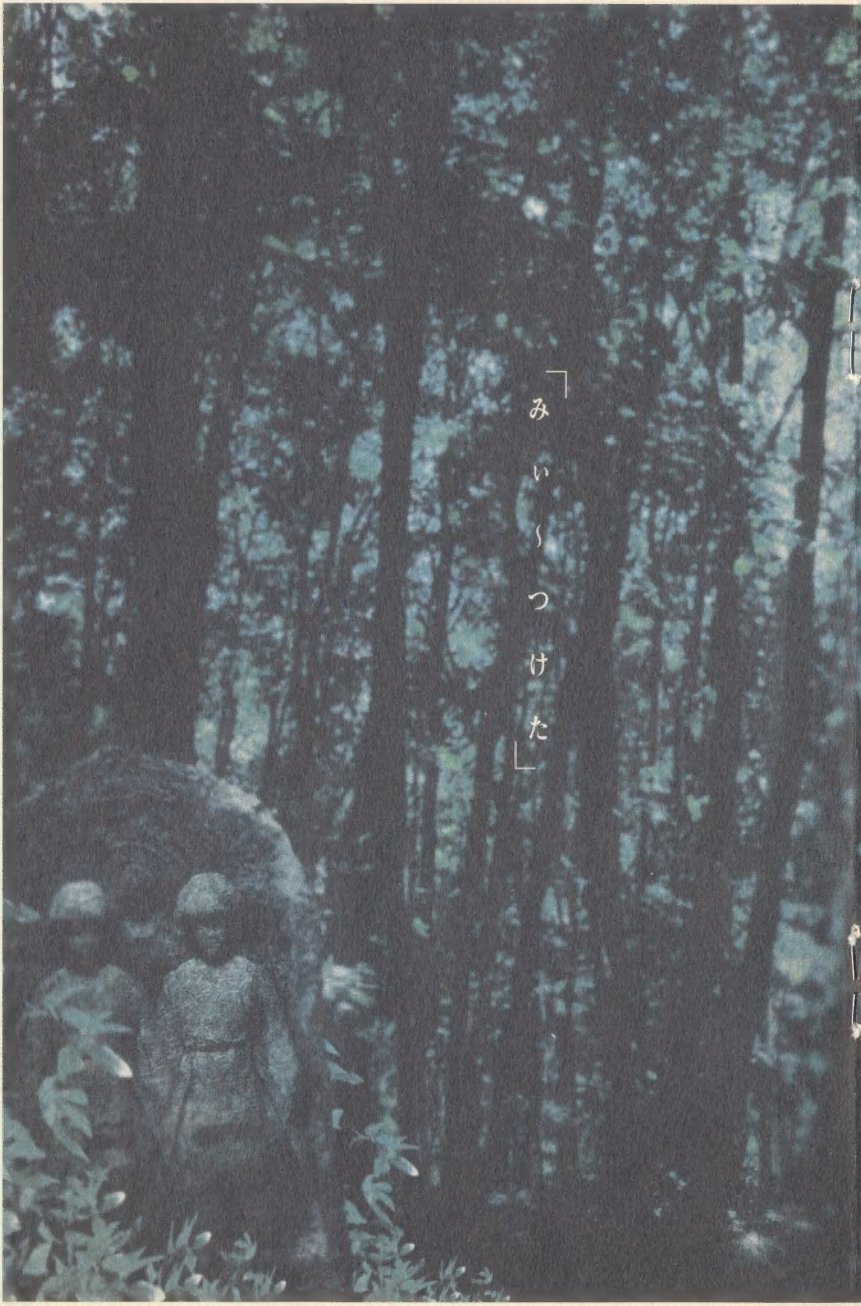
短い沈黙に口火を切ったのは浮月だった。ふと我にかえり、暮葉も浮月の言葉に付け足すように話出す。

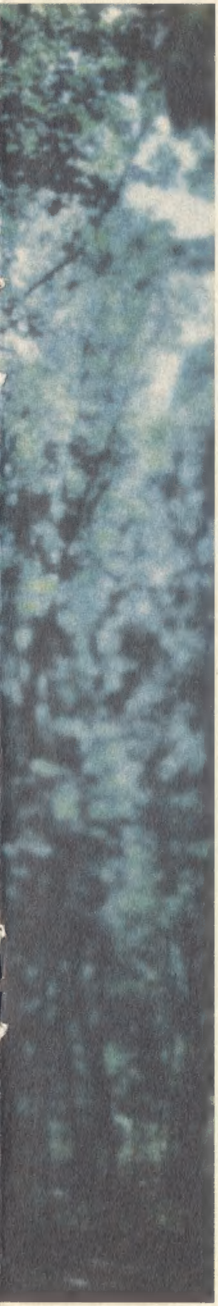
「可哀想に…」

苦しげにもがく鳥は、心配そうに見つめる姉妹の前で、その動きを着々と弱めている。

生きて欲しいと思うが、今の苦しむ姿を見れば助からないのは明らかで、その時間はとてもとても長く感じた。暮葉と浮月は、自分の無力さを痛感しながらも、やがて動きが止まるその瞬間まで無言のまま見つめていた。

「安らかにお眠り下さい…」


「みぃ〜つけた」



離を物語っている。
闇に覆われた山道は、見る物全てを怪しく映し出し、二人が踏みしめる枯葉の音ですら怪しく感じさせる。
浮月は足の痛みを我慢しながら歩いている。
すると突然、耳のすぐそばで声が聞こえた。

「みぃーつけた」

「えっ!?」

耳元に残る小さな吐息の感覚。
腰まで伝う嫌悪感に反応して仰け反る浮月。慌てて周りを見回すが誰も居ない。
しかし、近くで何かが聞こえる。
小さい小さい声だが、風で揺れる木々の音に混ざり童の歌声が聞こえる。

「はしぞろえ～　はしぞろえ～…」

耳を澄まし聞き入る浮月。
その歌声は怪しく反響し、禍禍しい旋律とともに、重く圧し掛かる恐怖を創造している。

「この場に居ては危ない…早く戻らないと…」

直感が身に迫った危険を、脇を伝う汗となり自分自信に知らせている。

落ち着きを取り戻す為に何度か深く呼吸をする。

「一体、どうしたのですか？」

浮月を抱き起こし、優しく砂を払ってくれる暮葉。

しかし次の瞬間、暮葉は目を見開き息を飲んだ。

「こっ…、これは…」

暮葉が砂を払っていた浮月の着物。

その手の先には小さい手の跡と桑の実がべっとりと付いていた。

「そんな・・・」

続けて浮月も落胆の声を発する。

姉に抱き起こされた視線の先には、

小さい花が二つ飾られた双子の地蔵が佇んでいた。

雨が降り注ぐ庭を眺めていた浮月は、いつの間にか眠っていたようだ。

「この陰雨は一体どのくらい続くのでしょう…」

浮月に微笑みかける。

いつもと変わらない暮葉の笑顔を見るのが辛い。

「あの後、私は…私のせいで、おねえさまは…」

夢の続きを思い出し、自分で自分を責める浮月。

暮葉は不思議そうに手を差し伸べる。

「さぁ、浮月。多少雨も弱まりました。これ位の雨であれば、お屋敷へ着く頃には雨も止みましょう。」

姉を見上げて頷く浮月。

差し伸べた色白で華奢な暮葉の腕には、

大きな傷があり、その傷口からは今にもこぼれそうな鮮やかな朱色の実が付いていた。

（了）

「おねえさま！」
　不安にかられる浮月の視界には、さっきまで先を歩いていた姉の姿は無い。
「おねえさま！　おねえさま！」
　恐怖を紛らわすように声を張る。だが、何度呼びかけても、いつもの優しい返事は無い。
　浮月が姉を探そうと足を踏み出そうとした瞬間、何かが物凄い力で着物を掴んでいる。
「きゃ！」
　不意な力に驚いた浮月は、その場に倒れこんでしまった。

「くすす…、あはは…」

　空を見上げた浮月を覗き込む幼い四つの瞳。

「ねぇ、あそぼう？」

　余りの恐怖に引きつる浮月。

「あそぼう？」

　触れそうな程に近づく二つの白い顔、顔にかかる息は冷たく生気を感じない。
　途切れそうな意識を繋ぎとめつつ、無抵抗に瞳を閉じる浮月。
　すると肩を掴まれた。

「一体どうしたのですか…？」

　怯える浮月に、いつもの優しい声が聞こえる。
　恐る恐る開いた目の先には優しい姉の姿が。
　状況を理解できない浮月は何度か辺りを見回す。
「浮月、一体どうしたのですか‥？」
　心配そうに覗き込む暮葉。

【横の鍵】

1 「九怨」の面白さのひとつです。ホラー。怖いです。
5 京都の有名な名物のひとつ。
綺麗な水と大豆で作られた○○○。
9 死んだものが生き返ること。次から次へと死者が○○○○○。
11 99歳のお祝い。百という漢字から上に付いている一を取ると
白になる。
13 鵜を使って行なう漁。岐阜の長良川のソレが有名です。
14 印を押す道具の事。
15 これを伺って、好機を待つ。○○有りっ!!
16 映画にもなった○○○○○、
狐の子供とまで言われた安部晴明が最も有名か。
18 全く筋道のたたない状態を○○苦茶と言います。
19 激しい怒りの為に髪が逆立つ事を『○○○天をつく』と言います。
22 紙質が強く、美術的に用いられる。ジャパニーズペーパー
23 働きもの、○○とキリギリス。黒、白。
24 京都市中京区にある○○寺は、幕末には新撰組の屯所となった。
25 家系の初代。血統の初代。○○代々続く家。
26 酒を売るのは酒屋、傘を売るのは傘屋。それでは門松を売るのは?
28 平安時代から現代まで続く庶民派室内遊戯。
サイコロ、ボードゲーム。
30 欲がひじょうに強い事。
31 平安時代の成人男子が日常的に用いたかぶり物。
32 ２で割り切れない奇数、２で割り切れる数は?

【縦の鍵】

1 イメージビジュアルを手掛けた人気画家「智内○○○○○」氏は、
「死国」などの文庫本表紙も手掛けました。
2 昔は「○○○そろばん」と言い、学問の基礎となる能力をさしていた。
3 風邪の予防には「これ」と手洗いが一番です。
4 音楽の授業でも練習した楽器のひとつ。吹いて鳴らす楽器。
6 政党などで保守的な考えを持つ集まり、保守派。または笑い声の擬音。
7 ２月に行われる節分。掛け声は『○○○○○~、鬼は外~』
8 お酒を閉まっておく倉庫。さかぐら
10 プロデューサー谷口の人気ＲＰＧ。ボタンひとつでモンスターを召喚。
最新作はＲＵＮＥⅡ。
12 日本古来の礼拝施設。京都に安部晴明が祭られる晴明○○○○がある。
16 声を押さえて泣くこと。いわゆる「むせび泣き」のこと。
17 嫁ぐ事が決まった時に持ち込む道具の事。
19 フロム・ソフトウェアの携帯サイトは、○○○○が運営する
着メロサイト『イロメロミックス』の中にある。
20 「九怨」の中で、双子が口ずさんでいる童歌のタイトル。小説をよんでね。
21 九怨を開発したフロム・ソフトウェアは、若者の街、
東京都○○○区にあります。
23 生まれて間もない子供。万葉集では『みどりご』として用いられた。
24 プロデューサー谷口の処女作。ＰＯＰな作品『くりクリ○○○○』。
25 九怨をプレイすると激しい恐怖感で「○○が寒くなる」。
27 何をすべきなのか、何処へ進むべきなのか、選択に○○○、道に○○○。
29 中央が低い、へこんでいる。この凹の読み方。凹む。

九怨文字ぞろえ

問題　小説に出てくる人物で、独自の陰陽術を使いゲームの中では物語のカギをにぎる、重要人物の一人は誰でしょうか？
AからGまで順番に並べ替えて答えてください。

1	2	3	4	■	5	6	7	■	8 B
9				10	■	11		12	
13 E			■		■	■	14		
15		■	16	G		17			■
	■	■		■	■	18		C	■
■	19 D	20		■	■		■	■	21
■	22		■	■	23 A		■	24	
25			■	■	26		27 F		
28			29	■	30				■
	■	31			■	32			

合計50名様に豪華賞品が当たるスペシャルチャンス！

正解者の中から抽選で
①5名様に、4月1日発売予定の話題の和風ホラーゲーム『九怨-kuon-』をプレゼント。
②45名様に『九怨-kuon-』のスペシャルムービーや制作秘話が収録された非売品DVDをプレゼント。

【応募要綱】　メールまたは官製はがきに、①クイズの答え　②住所　③氏名　④電話番号　⑤職業　⑥年齢をご明記の上、下記あて先までお送りください。

メールの方はこちらまで。**kuon@fromsoftware.co.jp** までお送りください。

官製はがきの方はこちらまで。
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚2-26-2　笹塚ノース小田急ビル5F　（株）フロム・ソフトウェア
『九怨 文字ぞろえプレゼント係』まで。

なお、当選者の発表は商品の発送をもって発表にかえさせていただきます。皆様のご応募をお待ちしております。

GAME SYSTEM

プレイヤーを追い詰める！「途切れない恐怖」




複雑に入り組んだ屋敷内、その隅々の闇が心理的恐怖感を創出し、より一層の心理的恐怖を煽る。天井から覗く得体の知れない影、見え隠れする人影、影のちらつき、様々なシチュエーションで驚きとためらいを誘う。
…日本の怪談美、ここに極まる！

ボリューム豊かなシナリオ！「マルチキャラクターシステム」

本編は「陰の章」「陽の章」から構成され、それぞれタイプの異なるキャラクターを選択し、その視点を通して描かれる物語は複雑に伏線が張り巡らされ、真実が見え隠れする真の怪談物語がそこに。 …交錯するストーリーがプレイヤーを平安怪談劇に引き込む！




陰陽術を再現！「符システム」




何処からともなく現れ不幸をもたらす魍魎たち。「符」と呼ばれる御札を使用することで式神を召喚。直感的な操作で瞬時に術が発動、一瞬の判断力が試されるスリリングな戦い。 …陰陽の理をもって、降魔の印を結べ！

溢れる怪談&恐怖システム

1. 禍風(まがかぜ)　もののけの妖気から繰り出される突風。禍風が起こるとき、災いがそこまで足を忍ばせている…。

2. 覗絡繰(のぞきからくり)　ふすま越し、壁越し、と様々なところで中を覗き込むシーンが。そこで貴方は戦慄の恐怖を覗いてしまうかもしれない…。

3. 動悸と眩暈　過度の精神負荷と激しい動作で主人公は動悸と眩暈を起こしてしまう。闇の中で無防備になると…。

4. 葛籠とわらべ唄　時折見かける葛籠とわらべ唄の旋律。二つは事件の真実に深くかかわり、詞の見立てに葛籠の意味、恐怖はさらに加速する…。









"プレイステーション2"専用ソフト 怪談アクション [九怨-kuon-] www.ku-o-n.net

4月1日発売予定

プレイヤー人数 1人 | "PlayStation 2"専用メモリーカード(8MB) 111KB以上 | アナログコントローラ(DUALSHOCK 2)専用

オフィシャルホームページ http://www.fromsoftware.co.jp/

製　品　情　報



PACKAGE

タイトル

九怨 -kuon-（くおん）

ジャンル	：	怪談アクション
メディア	：	DVD-ROM
プレイヤー人数	：	1人
発売日	：	2004年4月1日発売予定
価格	：	6,800円（税込み7,140円）
公式サイト	：	http://www.ku-o-n.net/

PROLOGUE

夜な夜な聞こえてくる、鼓の調べとおさなごの唄い声。
亡霊のように彷徨い歩く住人と、闇に蠢く餓鬼たち。
その屋敷に足を踏み入れた者は、二度と戻ってくることはなかった。

平安の世に名を馳せた稀代の陰陽師、蘆屋道満の元に届いた依頼は、
その屋敷の謎を解明することであった。
師である道満の命を受け、屋敷に向かった「咲耶」と他の弟子達。
一行はその屋敷で、姉の帰りをじっと待つ儚げな少女「浮月」に出会う。

妖しく絢爛な平安京を舞台に繰り広げられる、血飛沫舞う戦いと、
絡みつく因縁の糸。すでに異界のごとく様変わりした闇蠢く屋敷で、
事件の真相を究明することができるのか。

本当の恐怖は覗いてはいけない…。



FROM SOFTWARE

www.ku-o-n.net